

福島県県外避難者帰還・生活再建支援補助金

事業評価調査書

団体名 特定非営利活動法人フュージョン社会力創造パートナーズ

事業名	茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業、及び戸別訪問事業
事業の内容 事業の目的	<p>【事業内容】 以下の2つの事業を柱とする。</p> <p>1. 茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難先である「いばらき」の魅力を知るための交流会を5回、避難者主体で実施する。具体的には家族向けに「いばらきの美味しいを食べる」交流会として、夏のスイートポテト作り（行方市）、秋のぶどう狩り交流会（行方市）、春のイチゴ狩り交流会（つくば市と鉾田市で各1回）を4回行う。また、稲敷地区のまち歩き交流会第三弾を牛久市で1回行う。 ・上記5回の交流会とは別に、2年ぶりに自主避難者に絞った交流会を1回開催する。 ・今年度も、避難者が主体となった交流会として、地元民政委員や支援者と連携しながら実施する。 ・交流会参加費用は、一部を参加者負担とする。 <p>2. 戸別訪問事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年6月1日から令和2年3月31日まで適宜実施する。 ・茨城県つくば市、旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、阿見町、牛久市）等の茨城県南地域への避難者（一部は自主避難者）を対象とし、延60世帯の訪問活動を行う。 ・その際には、福島県・福島県内各町の復興支援員・各自治体・教育委員会・社会福祉協議会・民政委員・茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」・避難者自助グループなど、多様な方々と連携しながら、効果的な戸別訪問を行う。 <p>上記の事業を効果的に実施するために、ふうあいねっとや福島県内支援団体、また、他県の避難者支援ネットワークの会合にも参加し、情報交換を行っていく。</p> <p>【事業目的・必要性】 茨城県内への避難者数が3,291人（平成31年2月28日福島県発表）と、東京都に次いで2番目に多く、未だに高止まりをしていることを考えると、茨城県内での支援の在り方が他県での避難者支援にも良い影響をもたらすことができるようにしていきたいと考えている。</p> <p>1. 茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難先での移住を決められた方がほとんどであるため、「いばらき」の魅力を知ることで、地域の良さを感じてもらおう。これにより、茨城に住み続けるにしても、誇りと愛着を持って、生活がしていける基盤づくりを行う。 ・平成29年度から実施している「いばらきの美味しいを食べる」交流会は、毎回盛況であり、継続開催を希望する声も寄せられているため、今年度も毎回テーマや開催場所を変えて取り組むことで、より広く避難者ニーズに答え得るものとなることを考える。 ・平成30年度に茨城大学が行った避難者アンケートによると、自主避難者交流会を開催して欲しい、との声が1件ではあるが寄せられていたため、2年ぶりに自主避難者に限定して交流会を開催することで、自主避難者の声を拾い上げる機会としたい。 ・本NPOは、当事者たる発起人を、あくまでも黒子としてサポートすることで、当事者の主体性を引出し、自ら課題解決に向けて、連携や意見交換できる基盤作りをするものとする。そのために会の運営に当事者に関わって頂くスタイルで継続して取り組んでいく。 ・震災後8年を経過しても、ようやく交流会に参加して見ようという気になった、という方もいらっしゃるため、まだまだ交流会の必要性はあるものと考えます。 ・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学学生とも連携することで、次世代の地域社会の担い手を育む機会ともする。 <p>2. 戸別訪問事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災後8年が経過し、避難者のニーズも個別の実情に応じて多様に変化している。平成30年度に茨城大学が行った避難者アンケートによると、回収率は減少しているものの、1件1件の課題は深刻なケースが目立ってきており、また、心身の不調を抱える家族がいるとの回答も多いため、パーソナルケアに取り組んでいく。その中で、より個別の実情に応じた専門機関や地域に繋いでいくことで、ニーズが表面化しにくい、声が挙げにくい、体調が万全でない、地域付き合いが上手くできない、などの環境に置かれている避難者の生活をサポートし、パーソナルケアを行っていく。

	<ul style="list-style-type: none"> つくば市以外の県南地域の自治体では、本NPOが6年前から旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、牛久市、阿見町）で、一部民生委員と連携しながら交流会や戸別訪問活動に力を入れ始めたものの、つくば市ほどの支援は受けられていない。そこで、我々支援者側が手を引いた後も、継続的に、地域での見守り体制づくりが行われるきっかけとなるよう、避難者と地域、また避難者同士のセーフティネット作りをしていくことを目的とする。 筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学学生とも連携することで、次世代の地域社会の担い手を育む機会ともする。
事業実施内容	<ol style="list-style-type: none"> 令和元年6月1日～令和2年3月31日：戸別訪問活動 <ul style="list-style-type: none"> ●訪問延 56 世帯（実質 27 世帯。訪問先：つくば市、牛久市、土浦市、阿見町、つくばみらい市、水戸市、東海村への避難者） ●戸別訪問実働人数：6名 令和元年7月21日：なめがたファーマーズビレッジ交流会（スイートポテト作り） <ul style="list-style-type: none"> ●内容：「いばらきのおいしいを食べる、作る」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：なめがたファーマーズビレッジ（行方市） ●参加者：28名（避難者20名、支援者8名、うち子供7名） ●支援者参加者：NPOフュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> 令和元年9月29日：ブドウ狩り交流会 <ul style="list-style-type: none"> ●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：高須ぶどう園（行方市） ●参加者：43名（避難者34名、支援者9名、うち子供13名） ●支援者参加者：NPOフュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> 令和元年11月6日：自主避難者交流会 <ul style="list-style-type: none"> ●内容：自主避難者（被災時避難指示区域外）交流会 ●場所：つくば市役所コミュニティ棟 ●参加者：6名（避難者1名、支援者5名） ●支援者参加者：NPOフュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー、福島県避難者支援課茨城県駐在職員、福島県教育委員会から茨城県教育委員会への派遣教員 令和2年2月22日：イチゴ狩り交流会 in つくば（帰還者1名による協力） <ul style="list-style-type: none"> ●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：つくばねファーム、大穂交流センター（つくば市） ●参加者：53名（避難者44名、帰還者：2名、支援者7名、うち子供9名）

●支援者参加者：NPO フュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



6. 令和元年3月6日：稲敷地区まち歩き交流会（第6回稲敷地区交流会）

●内容：6回目の稲敷、美浦、阿見、牛久、土浦地区の交流会

●場所：牛久大仏、阿見プレミアムアウトレット、大杉神社（稲敷市）

●参加者：10名（避難者4名、支援者6名、うち子供3名）

●支援者参加者：ふうあい県南メンバー、NPO フュージョン社会力創造パートナーズメンバー、地域協力者 など



7. 令和元年3月8日：イチゴ狩り交流会 in 銚田

●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催

●場所：深作農園（銚田市）

●参加者：29名（避難者24名、支援者5名、うち子供12名）

●支援者参加者：NPO フュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



事業達成度

本事業の交流会の特徴は、多くの避難者が茨城県に愛着と誇りを持って住み続けられるように、茨城県内の名所を一緒に見て回ったり、美味しい食べ物を一緒に満喫することで、茨城県の良さを知ってもらい、かつ、その体験を通して地域住民、或いは避難者同士の仲間作りをしてもらうことにある。また、これまで支援が行き届きにくい旧稲敷郡や鹿行地域、さらに自主避難者の支援を続けていくことにある。その中で、以下の点が、達成度として挙げられる。

1. 茨城県の地域情報と魅力の発信

茨城県内の地域のまち歩きを行ったり、果物狩りなど、美味しい食べ物を食べることで、避難先である茨城県の魅力について身を持って体感してもらうことができた。6回の交流会の参加者総数は167名（うち避難者125名、帰還者2名、支援者40名）

	<p>と、特に茨城の食を通じた交流会に人気があり、やむを得ず人数制限をした会もあったくらいである。ただし、3月上旬に行った稲敷地区まち歩き交流会とイチゴ狩り交流会 in 銚子の2回の交流会は、新型コロナウイルスの影響もあり、会場が変更になったり、急なキャンセルなど理由で大幅に参加者が減ってしまったが、無事に催行することができた。</p> <p>2. 避難されている当事者が主体となった交流会事業 稲敷地区のまち歩き交流会では、避難者当事者グループの「ふうあい県南の会」に広報や事前準備、当日運営に協力してもらうことで、当事者が積極的に関わる会として進展させることができた。 また、いちご狩り交流会 in つくばでは、帰還者が運営に関わり、広報や当日運営を中心に役割を担うことで、当事者視点の会とすることができた。</p> <p>3. 旧稲敷郡や鹿行地域での避難者同士と地域との繋がり 本事業では、つくば市と比べて支援が手薄になりがちで、旧稲敷郡（牛久市、阿見町、美浦村、稲敷市）や鹿行地域（行方市、銚田市、鹿嶋市、神栖市）に避難されている方の戸別訪問活動や交流会を通して、地元キーパーソンとの連携の下、避難者同士、また、避難者と地域との繋がり作りを着実に行うことができた。交流会では、避難者同士が和やかに談笑したり、連絡先を交換する様子も伺うことができた。アンケートを見ても、非常に高い満足度を得る事ができており、交流会がかなり効果的に機能していることが伺える。</p> <p>4. 避難者個別のニーズに応じたパーソナルケア（戸別訪問） ほぼ予定通り延 56 世帯の訪問活動を行うことができた。事故から9年が経ち、避難者の多くはこのままの茨城県内避難先での永住を考えているが、高齢の方は亡くなったり、体調を崩される、という方も徐々に増えてきている。また、多くの方が福島から避難していることを近所に言えずに、本音で話をできる近所付き合いができていない方も多い。そのような状況下、当 NPO の木目細かな訪問が避難者の楽しみや励みになっていることも伺えた。今後も、地道ではあるが継続して寄り添った関わりを持ち続けていく。</p> <p>5. 筑波大学学生支援団体との連携 今年度から、久方ぶりに、筑波大学の学生支援団体にも訪問活動に協力してもらい、まだ数は多くはないものの、延3世帯を訪問することができた。各世帯、学生が来るのを楽しみにしてくれ、学生というだけで効果的な訪問活動となった。また、震災をあまり知らない世代にもなりつつあるため、風化を防ぎ、次の災害に備えるためにも、人材育成の機会ともなった。</p> <p>6. 筑波学院大学卒業生との連携 当 NPO 理事長が勤務する筑波学院大学卒業生が茨城県内各地で活躍し始めたため、そのネットワークと連携して、鹿行地域など、支援の拡大をすることができた。</p> <p>7. 他の支援団体との連携 当 NPO の理事長が、ふうあいねっとの副代表を務めていることもあり、当 NPO の活動から把握したことを、定期的な会議を通じて、ふうあいねっと、茨城県、福島県（福島県、福島県教育委員会、福島県内各町の復興支援員）、場合によっては JCN（東日本大震災支援全国ネットワーク）などに積極的に共有することで、効果的に連携をした支援に繋げることができた。また、茨城県内外の各団体の動きや課題を把握することで、俯瞰的に分析しながら支援に繋げることができた。</p> <p>8. メディアとの連携による情報発信 これまでのように、各メディアと情報交換をしながら活動を進めて行くことで、当 NPO の活動のみならず、把握しにくくなっている避難者全般の課題について、情報発信をすることができた。</p>
<p>今後の目標</p>	<p>震災から節目の10年目となり、以下の事に重点を置いて、引き続き寄り添った活動を関係組織や地域リーダーと連携しながら行っていくことで、セーフティネットに繋げていく。</p> <p>1. 避難者に寄り添ったパーソナルケアの継続 心身の不調、地域からの孤立、人間・社会不信など、表面的には見えにくい課題を抱えている避難者が多いことから、継続して訪問活動を通して寄り添っていく。このことで、表面化しにくい避難者の声を丁寧に拾い上げ、各支援団体、地域リーダー、専門機関などに共有し、セーフティネットに繋げていく。引き続き、筑波大学学生支援団体などにも協力してもらい、若い力も結集させて、集中して訪問活動を行う。10年目は、少なくとも延100世帯の訪問により、ニーズや課題の再調査も行う。</p> <p>2. 避難されている当事者が主体となった交流会の開催 交流会開催に当たっては、継続して、避難者や帰還者に協力して頂くことで、当事</p>

者が主体となった活動を行っていく。特に企画、広報、当日運営の面で、連携を行う。

3. 茨城の魅力を共有する交流会の実施

一昨年度から、避難先である茨城県内の地域のまち歩きや、果物狩りなど美味しい食べ物を通して、茨城県の魅力を共有する交流会にスタイルを変えている。結果、とても多くの方から申し込みを頂いており、大盛況となっている。多くの方から他にも色々なところに行きたいとの声も頂いているため、このスタイルを継続するとともに、県内各地での参加型の活動が行える場所の発掘も行う。これまで茨城県南中心となっていた交流会も、今年度から鹿行地域での開催も増やし、好評であったため、来年度は県西地域にも幅を広げる。このように、楽しいイベントを通して更なるセーフティネット作りに寄与していく。

4. 茨城県内各自治体・教育委員会、福島県・福島県教育委員会、福島県内各町の復興支援員等との連携強化

これまでもつくば市を始めとした茨城県内各自治体・教育委員会、茨城県内で活動を行っている福島県・福島県教育委員会や福島県内各町復興支援員、避難者自助グループなどと密に情報共有をしながら活動を行ってきた。今後も継続して連携した効果的な活動を進めていくことで、更なる地域でのセーフティネット作りを構築していく。

5. ふうあいねっとや他県の支援ネットワークとの連携

本 NPO だけではどうしても手におえなかったり、行き詰ってしまう事があるため、ふうあいねっとや他県の支援ネットワークとの情報交換などにより、俯瞰的に活動をふりかえり、より効果的な活動を行っていく。

6. メディアとの連携

これまでのようにメディアとの連携を通じた情報発信により、問題が風化しつつある避難者の課題について、広く取組を紹介していく。

特に、10 年の節目を迎えるに当たり、メディアの動きもより活発になってくることが予想されるため、早め早めの寄り添った取材対応を心掛けていきたい。